



焼け跡の人情つないだバラックの街 上

—七十七年の自治を展覧会で回顧—

ノンフィクション作家 **三山 喬**

杜の都・仙台のシンボル、伊達政宗の騎馬像がそびえ立つ仙台城址（青葉城址）の公園。その高台から東方を見渡すと、目の前を横切る広瀬川を越えた先に、ビル群がひしめく市街地中心部のパノラマが広がる。視線を直近の崖下へと移すと、そこには冬枯れした芝地と駐車場が並ぶがらんとした空間がある。

◀戦後コミュニティの痕跡

この細長い緑地帯、青葉山の崖と広瀬川に挟まれたエリアこそ、大都市仙台の片隅で、焼け野原の残り香を伝えてきたコミュニティ「追廻住宅」の跡地に他ならない。

つて知る。

つまり追廻住民の戦後の歳月は、一方ではこの公園計画の撤回を行政に求め続け、他方では彼ら自身の手で水道を引いたり道路を舗装したり、孤立無援に近い状態で最低限のインフラを整えてゆく日々だった。

最盛期、地区の人口は約四千人に達したが、平成に差しかかると世代交代もあり、櫛の歯を欠くように居住者は減り始める。そして一九九六年、国はその十年後をもって土地の賃貸契約を打ち切ることを通告した。地元自治会は立ち退きへの反対をその後も続けたが、二〇一〇年代になるころには地区の大半が空き地となり、ぽつぽつと数軒の家屋が点在する風景へと街は変貌した。

最後の一軒が居住者の同意のもと撤去されたのは昨年二月。仙台の一角に令和まで存在した、戦後コミュニティの痕跡は、こうして完全に消え去ったのだった。

私がそんな追廻地区のことを知り、関心を持ったのは、昨年（二〇二三年）十一月十二月、仙台市の文化・社会教育施設「せんだいメディアテーク」で催された

戦前戦中は、この青葉山に本部を置く陸軍第二師団の練兵場だった。終戦後の昭和二十一（一九四六）年春ここに住宅営団の応急簡易住宅（賃貸住宅）約六二〇戸が完成し、仙台空襲の被災者や外地からの引揚者を収容した。

追廻住宅は、こうして「バラックの街」として形成され、居住者個々人が徐々にそれを小ぎれいに建て替えた住宅群である。入居の開始から二年後に住宅営団が解散したあとは、上物のバラックを各世帯が買い取って国に借地料だけを支払うようになった。しかし仙台市は追廻地区や仙台城址を含む一帯を「青葉山公園」とする都市整備計画をすでに立てていて、人々はいずれ立ち退きを迫られる立場にあることをあとにな

『自治とバケツと、さいかちの実—エピソードでたぐる追廻住宅—』という施設主催の展覧会を見てのことだ。

タイトルの文言にある「バケツ」は、広瀬川の氾濫や住宅火災などの災厄をその都度団結して乗り越えた人々の体験、「さいかちの実」は川で衣類を洗う際、洗剤代わりにした木の実であり、物資不足を補った暮らしの知恵を示している。「自治」は字義そのままの意味合いだが、戦後の追廻では、荒野の開拓地さながらに「手づくり」で何もかも生活基盤をつくる必要があり、住民の密接な協力、積極的な自治こそがそれを可能にした。

そう、この展覧会において追廻は、焼け跡の時代からの助け合い、人間関係がそのまま継続したコミュニティとして紹介され、さまざまに趣向を凝らした展示物により、住民の細やかな息遣いが丁寧に再現されていた。

貧しさの中にロマンも夢も

会場入り口のスペースには、追廻に暮らしていた元